

---

# Fragment Stories

空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fragment Stories

### 【Nコード】

N9100Z

### 【作者名】

空

### 【あらすじ】

コレはある創造主が生み出した、数々の物語。一つ一つは小さくとも、集まることによりいつか天をも掴みうるだろう。そんな物語の、小さな小さな断片集。

基本的にオリジナルの話がほとんどで、二次創作の話は少ないです。

## 始まりのセカイ（前書き）

とある世界で起こった、一人の天才の世界を揺るがした大事件。  
その始まり。

## 始まりのセカイ

月夜の下。まるで肌に突き刺さるかのような冷気によって、少年は眠りから目覚めた。

「おや？ 起きたのか、調子はどうだい？」

誰かの声が聞こえる。

「誰だ？」

少年は先程まで寝ていたベッドから体を起こし、周囲を見渡す。見慣れた自身の部屋が目に入る。その中に、歳は二十代前半だろうか、黒髪の女性がいた。

「おはよう、揚羽<sup>あひは</sup>君。ぐっすりと良く眠れたかい？」

腰まで伸びたしなやかな黒髪を揺らしながら彼女は少年、揚羽に問い掛ける。開いた窓から差し込む月光も相まって、その姿はとも幻想的に見える。

「……………」

その光景に揚羽は思わず目を奪われ、しかしすぐにハッとす。彼女は何故自分の名前を知っていたのだろうか。記憶に狂いが無ければ、彼女とはこれが初対面のはず。それに部屋のドアには鍵をかけていたはず、と。

この状況に対し、徐々に違和感が溜まってきた。

「……………貴女は誰ですか？」

まずは彼女の名前を確かめよう。そう思い名前を尋ねると、彼女はくすりと微笑み、こう告げてきた。

「覚えてないの？ 酷いなあ、ずっと一緒に遊んでいたじゃない」

彼女と揚羽の目が合う。

「ほら」

……何故忘れていたのだろうか、それほど迄に彼女の名前は自然に頭に浮かんできた。……先程の違和感など消し去って。

「ゴメンな鈴すず。なんか、寝ぼけてたみたいだ」

とりあえず彼女、鈴に謝る揚羽。

「別にいいわよ」

彼女は窓際から離れ、揚羽の本当に目の前まで歩いてきた。

「だって、本当は初対面なんだから」  
「え？」

彼女が再び揚羽の目を見つめ、ゆっくりとその言葉を口にする。

「解けよ」

その瞬間、先程の違和感が再び戻ってきた。それも、先程迄

より遥かに強烈に。

「……っ！ 貴女は、本当に誰ですか？」

強すぎる違和感に頭を揺さ振られながらも、彼女にもう一度尋ねる。お前は誰だ、と。

「私は鈴。この世界の異端者イレギュラーよ」

「この世界？」

「ええ、此処は現実の世界とは違う仮想世界。通称、『カルマKarma』と呼ばれているわ」

そんな馬鹿な！ 揚羽はそう言い返そうとして、しかし言い返すことは出来なかった。

「そんな……」

「君ならわかるはずだよ。」

君が先程から感じている強烈な違和感が、その証拠さ」

揚羽がずっと感じている強烈な違和感。それが、此処が仮想世界であるという証拠であった。

「さて、そろそろ本題に入って良いかな？」

「本題だった？」

「そうさ。」

単刀直入に言う。私と一緒に、本当の現実せかいを取り戻さないか？」

これが彼等の長い長い始まり。

これからも彼等の物語は続いていく。しかし、それを語るのはま

た次の機会となるだろう。

## 始まりのセカイ（後書き）

え？ 意味不？

まあ、気にしない方向でお願いします



## バレンタインデー（前書き）

とあるバレンタインデーの一日。  
かなり昔に某SNSサイトに投稿したものです。

## バレンタインデー

「バレンタイン、バレンタイン。今日は楽しいバレンタイン」  
下駄箱の前でこんなことを歌っている男がいる。彼の名は春日井かすがい  
春日、何処にでもいるただの（・・・）男子高校生である。

「気持ち悪っ。」

どうせ、あなたには一個も来ないでしょ」

そうからかって来たのは幼なじみの綾香あやかだ。

「そういうお前はどうなんだよ、誰かにあげるのか？」

すると綾香は、ニヤニヤとした顔をし、こつこつ自慢してきた。

「私はあれよ、今年こそ愛の佐藤君にこの想いを伝えるのよ」

すると彼は少し嫌そうな顔をしたが、綾香は気付いていなかった。

「……まあ、俺は先に教室行ってるから。お前も遅れないようにしろよ」

放課後、既に教室からはほとんどの人が去り、残っているのは春日一人になっていた。

「……一つも無しとか、最悪」

帰るか、と一人呟き教室を後にする。

そのまま真つすぐ帰るつもりだったが、彼は廊下の角、ちょうど人目につかない場所に誰かいるのを感じ、こつそり隠れながら見る

ことにした。

「 貴方のことが大好きです、付き合ってください！」  
そこにいたのは綾香だった。そしてその相手は、やはり佐藤。だが、

「 済まない。気持ちは嬉しいけど、僕には好きな人がいるんだ」  
返されたのは、非常に残酷な一言だった。

「 ……わかったわ、ごめんね佐藤君。この事は忘れてちょうだい」  
「 ……ごめん」

佐藤が、帰ろうとこちらに歩いて来る。春日は咄嗟に隠れ、見つからないようにした。

佐藤が通り過ぎた後に、綾香のもとにゆっくりと歩く。

「 ……」  
「 ……」  
ほん、と綾香の頭に俺は無言で手を置いた。

「 ……春日。えへへ、恥ずかしい所見られちゃった」  
綾香は尚も気丈に振る舞おうとするが、春日がそれを止める。

「 我慢しなくていい。他に誰もいないから」

その言葉で、我慢しきれなくなったのだろう。彼女は塞きを切ったように泣き出した。

「 ……」

春日は無言のまま手を置き続けた。

そんなとある日の出来事。

大魔王の復讐劇（二次創作）（前書き）

ダイの大冒険の二次創作です



その瞬間。彼は何処か不思議な空間に存在していた。

「ここは……？」

大魔王たる自らですら認識出来ない世界。一体ここは何処なのだろうか。

『ここは“座”と呼ばれる空間さ。君の知っている神々、彼等ですら此処には辿りつけない』

響くのは先程の声。しかし、その姿は視認することが出来ない。

「……貴様は何者だ？　そして何をするつもりだ？」

すると、その声はここのたまった。

『私の名前か。……そうだな、「ルーラー」とでも呼ぶがよい』

『君にはこれから様々な世界を渡り歩いてもらう。そして、最強になっってもらおうのさ』

「何を言って」

『じゃあ早速だけど行ってもらうよ。最強になったら神々に復讐でもするがいい』

一方的に情報をたたき付け、消えようとする声。

「待て………！」

しかし。彼の叫びも虚しく、彼は自らの足元に出現した黒い穴に  
飲み込まれ、意識を失った。

Day Time Of Wonder Land(前書き)

某SNSで投稿した短編です。

テーマは「日だまり」



## Day Time Of Wonder Land

「……よいしょっ、と」

昼下がり。太陽は真上に君臨し、世界を照らしている。そんな中、懸命に働く一つの人影があった。

「掃除完了。それにしても、流石に昼は誰も来ないか……」

そう一人呟くのは、些か奇抜な服装をした女性。彼女は手に持った竹箒をクルクルと軽く回しながら、頭上の太陽を睨む。

「太陽さんや。頑張るのはいいが、毎日こんな状態じゃ赤字になってしまうのだよ。少し休暇をあげるからお客を呼んどくれ。」

「……それにしても、眠いなあ」

現在の季節は春。こんな時期の昼下がりと言えば、暖かくて眠くなってしまふものだ。もともと来客数の寂しい骨董屋に来るものなど存在しないだれう。かくいう彼女も眠そうにしている。待ち人さえいなければ、普段のように店を一時閉店にして安眠に耽っていることだろう。

「すみませーん、遊びに来ましたよー！ 起きてますかー？」

だが、そんな中に新しく一つの声が響き渡る。それは一人の少年。彼は被っていた帽子を被り直し、店内に元気良く入る。

「何を失礼なことを、それじゃ私がいつも寝ているみたいじゃない」

そう応える彼女だが、その目は半分閉じられており、誰がどうみても眠そうだとわかりそうな顔をしていた。

「……はいはい、とりあえず奥に行きましょう」

少年はそれに苦笑しながらも、せめて彼女を店の奥にまで行かせようとその背を押す。しかし彼女はその行動に不満があったのか、首を横にふるふると振りながら何とか眠気に立ち向かい、口を開く。

「……ん。いや、今日は外にしよう」

彼女はそう言い放ち、彼を店の外まで押し出す。店の入り口に『一時休業中』と書いた看板をぶら下げ、彼女はどこかへとふらふらと歩き出した。

「何処に行くんですか？」

それにキツチリとついて行きながらも、少年は彼女に行き先を尋ねる。どうやら少年は行き先を知らないらしい。しかし彼女はそれには応えず、ただただ黙々と目的地へと歩むのみである。

「……ん」

そうこうしている内に少し開けた場所に出た。ここが彼女の目的地なのだろう。彼女は懐からシートを取り出し、目の前の草がぼうぼうと生い茂った地面へとそれを敷いた。

「今日はひなたぼっこにするわ。ほら、貴方も来なさい」

彼女はそう言いながら少年を抱き抱えると、そのままシートへと

ダイブする。

「お休み。……後で起こしてちょうだい」

彼女はそう言い放つと、早々と眠りに落ちた。それに少年はまたもや苦笑しつつも、自身も眠いことに気づいた。

「コレは……、病み付きになりそうだな……」

そのあまりの心地良さにそう呟き、少年も日だまりの中でまどろむのであった。

Day Time Of Wonder Land (後書き)

いやー、日常は難しいですね。

感想はいつでも受付中ですので、誰か感想を下さい。

## 神様と私と命

さようなら、また明日。そんな他愛のないことを今日もまた喋る。決まりきった、毎日変わることの無い言葉。<sup>セリフ</sup>そんなのはもう聞き飽きた。

ただいま、お帰りなさい。お疲れ様、ありがとう。お休みなさい、お休み。明かりを消して瞼を閉じる。

おはよう、おはようございます。初めまして、初めまして。よろしくお願ひします、よろしく。今日もまた意味も無く、学校に通う。久しぶり、お久しぶりです。頼んだぞ、わかりました。これよろしくね、うんわかった。代わらない、毎日同じような受け答え。少し、頭が痛い。

さようなら、さようなら。唐突に考えてみた、私って何だろう。生命という活動を十七年間継続しながら、今現在高校という学び舎に通う生物学的上女性に分類される生命体。じゃあ、命って何だろう。よくわからない、多分生物が生きるために必要不可欠なモノ。

気が付いたら、何処かのビルの屋上に居た。顔を上げ、前を見る。太陽の光が綺麗だ、夕陽が傾いている。壊れたフェンス、触ってみる。怪我をした、痛い。あれ、頭がぼーっとしてきた。痛いつて何だろう。

神様、この世はわからないことだらけです。私はもう疲れましたが、もう寝ようと思います。体が勝手に動く。

神様、最後に一つお願いがあります。私って何なんでしょうか。命って何なんでしょうか。答えてくれると嬉しいです。あと………。あれ、おかしいな。だんだんと、地面が近くなってきたみたい。まあいいや。

皆さん。お休みなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9100z/>

---

Fragment Stories

2012年1月6日08時50分発行